

各関係機関の長
各病虫害防除員 殿

宮崎県病虫害防除・肥料検査センター所長

令和8年度病虫害発生予報第1号について
令和8年度病虫害発生予報第1号を発表したので送付します。

令和8年度病虫害発生予報第1号

向こう1か月間における農作物の主な病虫害の発生動向は、次のように予想されます。

○ 発生予報の概要

| 作物名 | 病虫害名 | 発生量の 平年比 | 本文での 記載ページ |
|----------------|--------------------|-------------|---------------|
| 早期水稲 | 1 いもち病(葉いもち) | 並 | 2 |
| | 2 イネミズゾウムシ | やや多 | 2 |
| | 3 スクミリンゴガイ | やや少 | 2 |
| 冬春きゅうり | 1 ベと病 | 多 | 3 |
| | 2 うどんこ病 | やや多 | 3 |
| | 3 褐斑病 | やや多 | 3 |
| | 4 黄化えそ病 (MYSV) | やや多 | 3 |
| | 5 ミナミキイロアザミウマ | やや少 | 3 |
| | 6 タバココナジラミ | 多 | 4 |
| 冬春ピーマン | 1 斑点病 | 並 | 4 |
| | 2 うどんこ病 | 多 | 4 |
| | 3 黒枯病 | やや多 | 4 |
| | 4 アブラムシ類 | 並 | 4 |
| | 5 ミナミキイロアザミウマ | やや多 | 4 |
| | 6 ヒラズハナアザミウマ | やや多 | 5 |
| | 7 タバココナジラミ | 多 | 5 |
| 冬春トマト | 1 灰色かび病 | やや少 | 5 |
| | 2 葉かび病 | 少 | 6 |
| | 3 すすかび病 | やや多 | 6 |
| | 4 うどんこ病 | 多 | 6 |
| | 5 トマト黄化葉巻病 (TYLCV) | 並 | 6 |
| | 6 タバココナジラミ | 多 | 6 |
| 野菜・工芸作物全般 | 1 アブラムシ類 | やや多 | 7 |
| | 2 ハスモンヨトウ | やや多 | 7 |
| バレイショ | 1 疫病 | — | 7 |
| カンキツ (露地栽培) | 1 そうか病 | 並 | 8 |
| | 2 かいよう病 | 並 | 8 |
| | 3 灰色かび病 | — | 8 |
| | 4 ミカンハダニ | やや多 | 8 |
| 果樹共通 | 1 カメムシ類 | — | 8 |
| 茶 | 1 炭疽病 | 並 | 9 |
| | 2 チャノコカクモンハマキ | 並 | 10 |
| | 3 チャハマキ | 並 | 10 |
| | 4 チャノホソガ | 並 | 10 |
| | 5 カンザワハダニ※ | 多 | 11 |
| | 6 チャノミドリヒメヨコバイ | やや多 | 11 |
| | 7 チャノキイロアザミウマ | 並 | 11 |
| | 8 ツマグロアオカスミカメ | やや多 | 12 |
| | 9 クワシロカイガラムシ | やや多 | 12 |

※は病虫害発生予察注意報を発表。

○ 作物の生育状況（4月中旬）

早期水稲は活着期。冬春きゅうり・冬春ピーマン・冬春トマトは収穫期、茶は萌芽期～収穫期、かんきつは発芽期であった。

○ 向こう1か月の気象予報

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%）

| 要素 | 低い(少ない) | 平年並 | 高い(多い) |
|------|---------|-----|--------|
| 気温 | 10 | 20 | 70 |
| 降水量 | 30 | 30 | 40 |
| 日照時間 | 40 | 30 | 30 |

（1か月予報 鹿児島地方気象台4月16日発表）

○ 発生予報の根拠および防除対策

早期水稲

1 葉いもち（並）

[予報の根拠]

（1）4月中旬の巡回調査では発生未確認である。（初発生日：前年 6/3、平年 5/31）

[防除上の注意]

- （1）補植用の置き苗は、葉いもちの発生源になるので、補植が終わったら速やかに処分する。
- （2）曇雨天が続く場合は葉いもちの早期発見に努め、病斑が認められたら速やかに防除する。
- （3）同一系統薬剤の連用は、薬剤耐性菌が発生しやすいので避ける。

2 イネミズゾウムシ（やや多）

[予報の根拠]

（1）4月中旬の巡回調査結果

発生面積率：37.5%（平年 22.9%、前年 0%）平年よりやや多

被害度：2.3（平年 1.0、前年 0）平年よりやや多

[防除上の注意]

（1）成虫が10株当たり5頭以上のほ場では、粒剤の水面施用を行う。水面施用に当たっては水管理に十分注意し、水深が3cm程度になるように調整するとともに、少なくとも4日間はかけ流しや落水はしない。

3 スクミリングガイ（やや少）

[予報の根拠]

（1）4月中旬の巡回調査結果

発生面積率：6.3%（平年 19.0%、前年 6.3%）平年よりやや少

m²当たり貝数：0.1頭（平年 0.6頭、前年 0.2頭）平年よりやや少

[防除上の注意]

- （1）水田の入排水口には金網を張り、貝の侵入を防止する。
- （2）貝の生息数が多い場合は、捕殺するか粒剤の水面施用を行う。
- （3）粒剤の水面施用に際しては水管理に十分注意し、水深が3cm程度になるように調整するとともに7日間はかけ流しや落水をしない。

冬春キュウリ

1 べと病 (多)

[予報の根拠]

(1) 4月中旬の巡回調査結果

発生面積率：100% (平年 77.1%、前年 85.7%) 平年より多

発病葉率：36.3% (平年 23.0%、前年 26.6%) 平年より多

[防除上の注意]

(1) ハウス内の換気を良くし、高温多湿にならないように注意する。

(2) 窒素切れや成り疲れによる草勢の衰えは、発生を助長するので適切な肥培管理に努める。

2 うどんこ病 (やや多)

[予報の根拠]

(1) 4月中旬の巡回調査結果

発生面積率：50.0% (平年 32.3%、前年 28.6%) 平年やや多

発病葉率：5.6% (平年 6.8%、前年 8.3%) 平年並

[防除上の注意]

(1) 整枝・誘引・老化葉の摘葉等を行い、採光・通風を良くする。

(2) 耐性菌の発生を避けるため、同一系統薬剤の連用を避け作用性の異なる薬剤をローテーションで使用する。

3 褐斑病 (やや多)

[予報の根拠]

(1) 4月中旬の巡回調査結果

発生面積率：25.0% (平年 8.7%、前年 14.3%) 平年より多

発病葉率：2.4% (平年 2.2%、前年 8.7%) 平年よりやや多

[防除上の注意]

(1) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、初期防除を徹底する。

(2) 窒素質肥料の多用は、発病を助長し過繁茂になって通風を妨げるが、逆に少ない場合は草勢低下を招くので、適正な肥培管理に努める。

4 黄化えそ病(MYSV) (やや多)

[予報の根拠]

(1) 4月中旬の巡回調査結果

発生面積率：25.0% (平年 16.0%、前年 0%) 平年よりやや多

発病株率：0.3% (平年 0.7%、前年 0%) 平年並

[防除上の注意]

(1) 本病はミナミキイロアザミウマによって永続的に伝搬され、発生後は急激には場内外に蔓延するおそれがあることから、厳重な警戒が必要である。

(2) 発生株の抜根・媒介虫であるミナミキイロアザミウマ防除の徹底・栽培終了時の蒸し込みを確実に実施するとともに、ほ場周辺の除草に努める。

(3) 今後気温の上昇に伴い野外におけるミナミキイロアザミウマの発生が多くなる見込みであるため、ハウスのサイドを開放する際は特に注意する。

5 ミナミキイロアザミウマ (やや少)

[予報の根拠]

(1) 4月中旬の巡回調査結果

発生面積率：37.5% (平年 53.2%、前年 71.4%) 平年よりやや少

百葉当たり虫数：6.0頭 (平年 30.3頭、前年 22.4頭) 平年よりやや少

[防除上の注意]

(1) 本虫は薬剤抵抗性を獲得しやすいので、同一薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤をローテーションで使用する。

(2) 収穫の終わった発生ハウスは、蒸し込み等により本虫を死滅させ、ハウス外への

拡散防止や次期作の発生源を絶つよう努める。

6 タバココナジラミ (多)

[予報の根拠]

(1) 4月中旬の巡回調査結果

発生面積率 : 75.0% (平年 28.9%、前年 28.6%) 平年より多

百葉当たり虫数 : 22.3頭 (平年 3.5頭、前年 3.1頭) 平年より多

[防除上の注意]

(1) 冬春ピーマンのタバココナジラミ(5ページ)を参照のこと。

冬春ピーマン

1 斑点病 (並)

[予報の根拠]

(1) 4月中旬の巡回調査結果

発生面積率 : 50.0% (平年 54.0%、前年 80.0%) 平年並

発病葉率 : 5.7% (平年 11.2%、前年 21.1%) 平年並

[防除上の注意]

(1) ハウス内が高湿多湿にならないように、換気と水管理に注意する。また、整枝を行って茎葉が過繁茂にならないようにする。

(2) 病原菌が植物体に侵入した後では、防除効果が上がりにくいので予防散布を行う。

2 うどんこ病 (多)

[予報の根拠]

(1) 4月中旬の巡回調査結果

発生面積率 : 90.0% (平年 49.0%、前年 50.0%) 平年より多

発病葉率 : 23.8% (平年 8.9%、前年 11.9%) 平年より多

[防除上の注意]

(1) 乾燥した条件で発生しやすいので、乾燥しすぎないように注意する。

(2) 適切な肥培管理を行い、また、茎葉が過繁茂にならないよう整枝を行い、発病葉は除去する。

(3) 収穫終了後は、ハウスを密閉して病葉上の病原菌を高温で死滅させるか、病葉残さを持ち出して処分し、次期作の伝染源を絶つ。

3 黒枯病 (やや多)

[予報の根拠]

(1) 4月中旬の巡回調査結果

発生面積率 : 10.0% (平年 5.1%、前年 0%) 平年よりやや多

発病葉率 : 0.1% (平年 0.3%、前年 0%) 平年よりやや多

[防除上の注意]

(1) ハウス内が高湿多湿にならないように、換気と水管理に注意する。発病葉はできるだけ早期に取り除き、ただちに防除を行う。

(2) 病勢が進展した後では、防除効果が上がりにくいので、できるだけ罹病部位をハウス外に持ち出した後防除を行う。防除は1週間間隔で2~3回実施する。

4 アブラムシ類 (並)

[予報の根拠]

(1) 4月中旬の巡回調査結果

発生面積率 : 0% (平年 4.5%、前年 20.0%) 平年並

50芯当たり虫数 : 0頭 (平年 1.6頭、前年 8.8頭) 平年並

[防除上の注意]

(1) 寄生数が増加してからの防除は困難なので、密度が低い時からの防除を徹底する。

5 ミナミキイロアザミウマ (やや多)

[予報の根拠]

(1) 4月中旬の巡回調査結果

発生面積率 : 10.0% (平年 11.2%、前年 0%) 平年よりやや多
10花当たり虫数 : 0.3頭 (平年 0.7頭、前年 0頭) 平年よりやや多

[防除上の注意]

- (1) ミナミキイロアザミウマの成虫が10花当たり1頭程度寄生すると、販売等級格下げとなる果実が5%発生するので、発見したら早めに防除する。
- (2) 今後、気温の上昇とともに例年増加していく時期であるので注意する。
- (3) 施設内では卵・幼虫・蛹・成虫が混在し、卵と蛹には薬剤がかかりにくいので、7日間隔で少なくとも3回の連続した防除を行う。
- (4) ヒラズハナアザミウマの薬剤感受性とは異なるので、防除の際は使用する農薬に留意する。
- (5) 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統薬剤の連用は避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布に努める。

6 ヒラズハナアザミウマ (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 4月中旬の巡回調査結果
発生面積率 : 70.0% (平年 68.3%、前年 60.0%) 平年よりやや多
10花当たり虫数 : 12.5頭 (平年 22.5頭、前年 15.8頭) 平年並

[防除上の注意]

- (1) ヒラズハナアザミウマは、生息密度が高まると果実被害が発生するので注意が必要である。
- (2) 今後、気温の上昇とともに増加していく時期であるので、増えすぎる前に適宜防除を実施する。
- (3) 主に花に生息するので、花内に薬剤が付着するように散布する。施設内では卵・幼虫・蛹・成虫が混在し、卵と蛹には農薬がかかりにくいので、7日間隔で少なくとも3回の連続した防除を行う。
- (4) ミナミキイロアザミウマの薬剤感受性とは異なるので、防除の際は使用する農薬に留意する。
- (5) 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統薬剤の連用は避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布に努める。

7 タバココナジラミ (多)

[予報の根拠]

- (1) 4月中旬の巡回調査結果
発生面積率 : 50.0% (平年 36.1%、前年 40.0%) 平年より多
百葉当たり虫数 : 11.5頭 (平年 2.8頭、前年 3.8頭) 平年より多

[防除上の注意]

- (1) 黄色粘着トラップ等を設置し、タバココナジラミの早期発見に努めるとともに、栽培期間を通して防除を徹底し、本虫の密度を抑制する。
- (2) 多発してからでは防除効果が低くなるため早めに防除する。また、薬剤散布後は防除効果に注意を払い、必要に応じて適宜追加防除を行う。
- (3) 施設内外の雑草は、タバココナジラミの寄主となるので除草を徹底する。また、施設内では栽培目的以外の不要な作物や観葉植物等は栽培しない。
- (4) 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、抵抗性発現の可能性が低い微生物農薬やコナジラミ類を物理的に窒息死させる気門封鎖剤を防除体系に組み込む。

冬春トマト

1 灰色かび病 (やや少)

[予報の根拠]

- (1) 4月中旬の巡回調査結果 (株)
発生面積率 : 0% (平年 37.3%、前年 12.5%) 平年より少
発病株率 : 0% (平年 8.5%、前年 0.1%) 平年より少

4月中旬の巡回調査結果（果実）

発生面積率：12.5%（平年 7.0%、前年 0%）平年並

発病果率：0.3%（平年 0.5%、前年 0%）平年並

〔防除上の注意〕

- (1) 多湿条件で発生しやすいので、ハウスの換気を良くする。
- (2) 発病果・被害茎葉は、感染源となるのでほ場外へ持ち出し処分する。
- (3) 薬剤耐性菌が発達しやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

2 葉かび病（少）

〔予報の根拠〕

- (1) 4月中旬の巡回調査結果

発生面積率：0%（平年 35.9%、前年 25.0%）平年より少

発病葉率：0%（平年 7.2%、前年 9.4%）平年より少

〔防除上の注意〕

- (1) すすかび病を参照のこと。

3 すすかび病（やや多）

〔予報の根拠〕

- (1) 4月中旬の巡回調査結果

発生面積率：37.5%（平年 22.0%、前年 37.5%）平年よりやや多

発病葉率：11.4%（平年 4.1%、前年 1.5%）平年より多

〔葉かび病・すすかび病の防除上の注意〕

- (1) 多湿条件で発生しやすいので、ハウスの換気を良くする。
- (2) 発病葉は感染源となるため、生育に支障がない限りできるだけ摘葉し、ほ場外へ持ち出し処分する。
- (3) 薬剤耐性菌が発達しやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

4 うどんこ病（多）

〔予報の根拠〕

- (1) 4月中旬の巡回調査結果

発生面積率：75.0%（平年 27.8%、前年 25.0%）平年より多

発病葉率：15.1%（平年 5.8%、前年 5.8%）平年より多

〔防除上の注意〕

- (1) 整枝・誘引・老化葉の摘葉等を行い、採光・通風を良くする。
- (2) 病勢が進展してからでは防除効果が低いので、発病を確認したら早めに防除する。
- (3) 上位葉への進展が見られるなど病徴の激しいほ場においては、1回散布では防除効果が現れにくいことがあるので、1週間間隔で2回以上の防除を実施する。
- (4) 耐性菌の発生を避けるため、同一系統薬剤の連用を避け作用性の異なる薬剤をローテーションで使用する。

5 トマト黄化葉巻病（TYLCV）（並）

〔予報の根拠〕

- (1) 4月中旬の巡回調査結果

発生面積率：0%（平年 2.3%、前年 12.5%）平年並

発病株率：0%（平年 0.0%、前年 0.1%）平年並

〔防除上の注意〕

- (1) 発病株は伝染源になるので根ごと抜き取り、土中に埋めるかビニル袋に入れて枯れるまで密閉する。ウイルスは植物全体に存在しているので、発病部位を除去しても伝染源になるため、必ず株全体を除去する。

6 タバココナジラミ（多）

〔予報の根拠〕

- (1) 4月中旬の巡回調査結果

発生面積率：87.5%（平年 52.9%、前年 75.0%）平年より多

百葉当たり虫数：118.5頭（平年 36.2頭、前年 52.5頭）平年より多

〔防除上の注意〕

(1) 冬春ピーマンのタバココナジラミ(5ページ)を参照のこと。

野菜・工芸作物全般

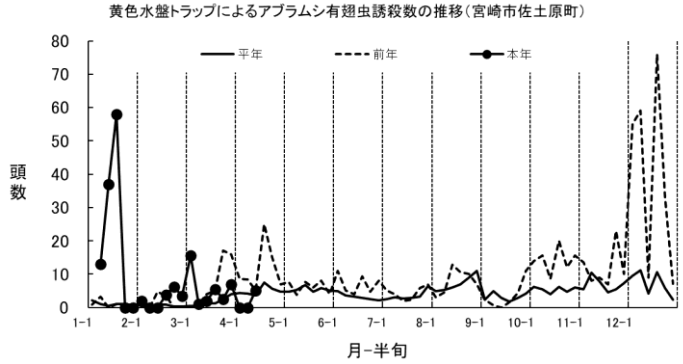
1 アブラムシ類 (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 黄色水盤トラップによる直近1か月の誘殺数(宮崎市佐土原町)は、平年よりやや多で推移している。(右図参照)
- (2) 4月中旬の巡回調査ではバレイショ、冬春キュウリ、冬春トマト及び冬春ピーマンで平年並の発生である。

[防除上の注意]

- (1) ウイルス病を媒介するので早期発見・防除に努める。



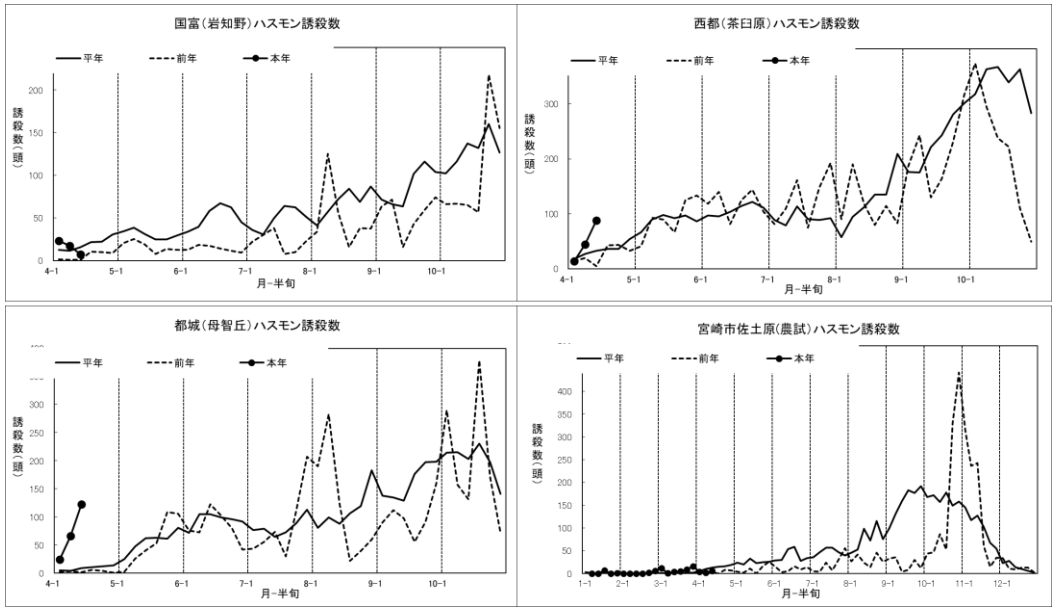
2 ハスモンヨトウ (やや多)

[予報の根拠]

- (1) フェロモントラップによる誘殺数は、都城市では平年より多、国富町及び西都市では平年よりやや多、宮崎市佐土原町では平年並で推移している。

[防除上の注意]

- (2) 発育が進んだ幼虫に対しては薬剤の効果が悪いため、早期発見に努め、若齢幼虫期の防除を徹底する。



バレイショ

1 疫病

[防除上の注意]

- (1) バレイショ疫病は多湿条件下で急激にまん延することから、予防防除を重点に置く。
- (2) 圃場の見回りを行い、発生を認めたら直ちに薬剤散布を行う。前年、本病が発生した圃場は、罹病残渣が重要な伝染源となるので注意する。
- (3) 薬剤散布は、薬剤が下葉に達するように十分量を散布する。

カンキツ(露地栽培)

1 そうか病 (並)

[予報の根拠]

- (1) 4月中旬の巡回調査では発生未確認であるが、総合農業試験場内の温州みかんで初発生を確認している(初発生日：本年 4/10、前年 4/17、平年 4/19)。

[防除上の注意]

- (1) 罹病した枝葉は伝染源になるので、発見したら直ちに剪除する。
(2) 今後の防除適期は、落弁期・幼果期である。

2 かいよう病 (並)

[予報の根拠]

- (1) 4月中旬の巡回調査では発生未確認である。
(初発生日：前年 5/12、平年 5/21)

[防除上の注意]

- (1) 罹病した枝は伝染源となるので、発見したら直ちに剪定する。
(2) 今後の防除適期は、開花直前・落花後・梅雨期・秋芽生育期である。

3 灰色かび病

[防除上の注意]

- (1) 防除適期は落弁期である。また、開花期から落弁期にかけての降雨は、本病の発生に好条件となる。
(2) 幼果表面に付着した発病花卉から幼果に伝染するので、枝をゆするなどして花卉の離脱を促す。

4 ミカンハダニ (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 4月中旬の巡回調査結果
発生面積率：31.3% (平年 22.0%、前年 25.0%) 平年よりやや多
寄生葉率：7.8% (平年 4.1%、前年 2.9%) 平年よりやや多

[防除上の注意]

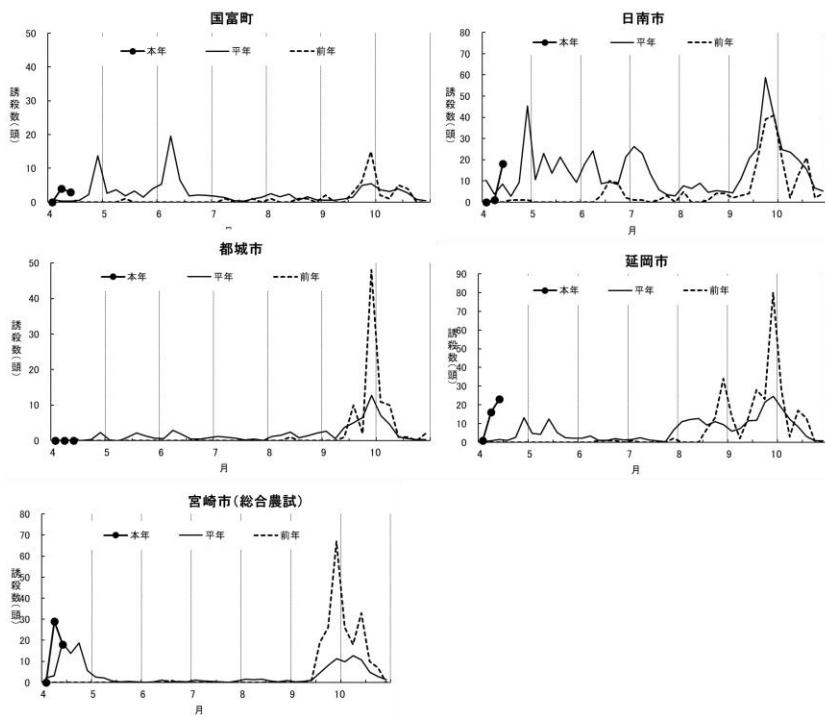
- (1) 生息密度が高くなると防除が困難になるので、寄生葉率 30%または1葉当たり虫数 0.5～1頭を目安に防除を行う。

果樹全般

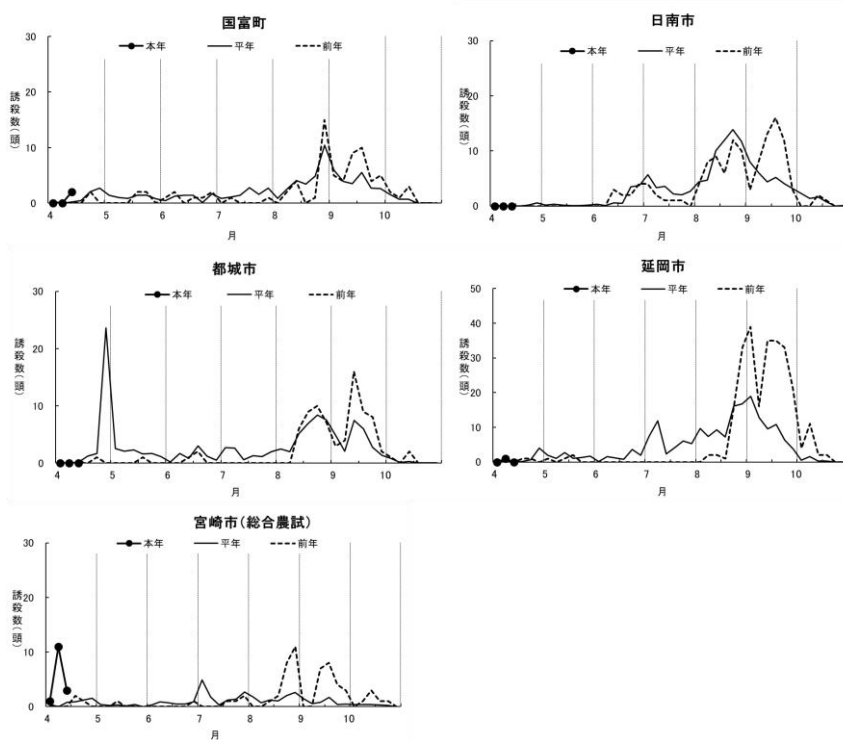
1 カメムシ類(チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ)

[防除上の注意]

- (1) 予察灯による誘殺数調査では、ツヤアオカメムシの誘殺数が平年より多くなっている。チャバネアオカメムシは、一部で誘殺が確認されている。
(2) 果樹カメムシ類は園外から飛来し、地域や時期によって発生量が大きく変動するので、園内外を見回り、早期発見・早期防除に努める。特にウメやモモなどの結実中の果樹類では飛来に注意し、初期防除を徹底する。



ツヤアオカメムシの予察灯誘殺状況



チャバネアオカメムシの予察灯誘殺状況

茶

1 炭疽病（並）

[予報の根拠]

(1) 4月中旬の巡回調査結果

発生面積率 : 8.3% (平年 7.9%、前年 0%) 平年並
 m²当たり病葉数 : 0.2葉 (平年 0.2葉、前年 0葉) 平年並

[防除上の注意]

(1) 一番茶摘採後の基幹防除を徹底する。

2 チャノコカクモンハマキ (並)

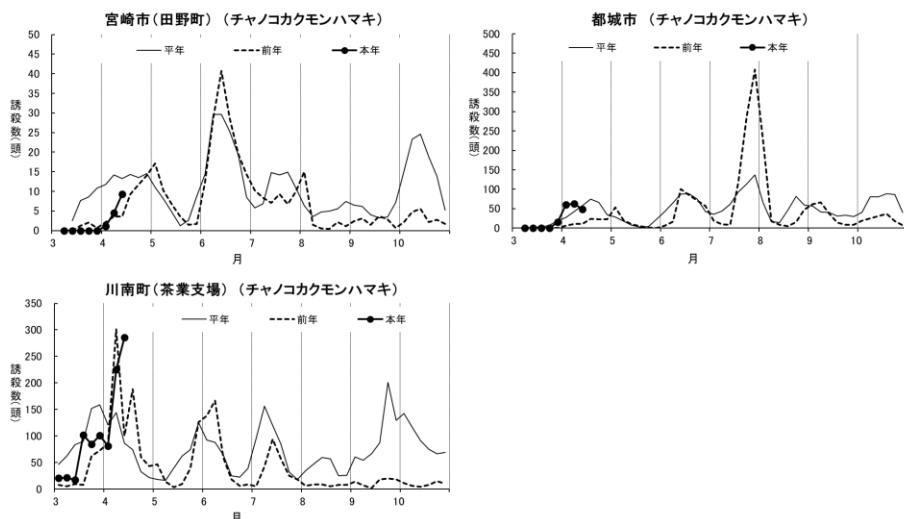
[予報の根拠]

(1) 4月中旬の巡回調査では発生未確認で平年並の発生である。

(2) 県内に設置しているフェロモントラップによる誘殺数は平年並～やや多である。

[防除上の注意]

(1) フェロモントラップによる誘殺状況では、次の発蛾最盛期は5月上旬頃と考えられる。



3 チャハマキ (並)

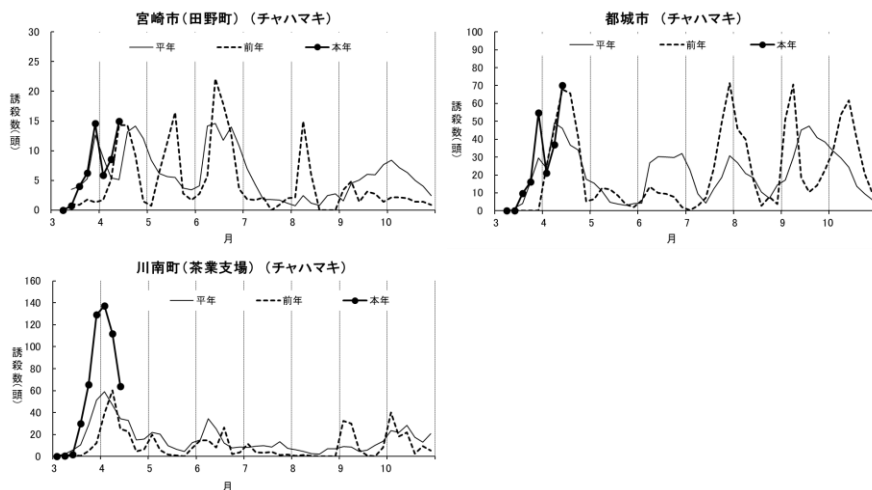
[予報の根拠]

(1) 4月中旬の巡回調査では発生未確認で平年並の発生である。

(2) 県内に設置しているフェロモントラップによる誘殺数は平年並～やや多である。

[防除上の注意]

(1) フェロモントラップによる誘殺状況では、次の発蛾最盛期は5月上旬～中旬頃である。



4 チャノホソガ (並)

[予報の根拠]

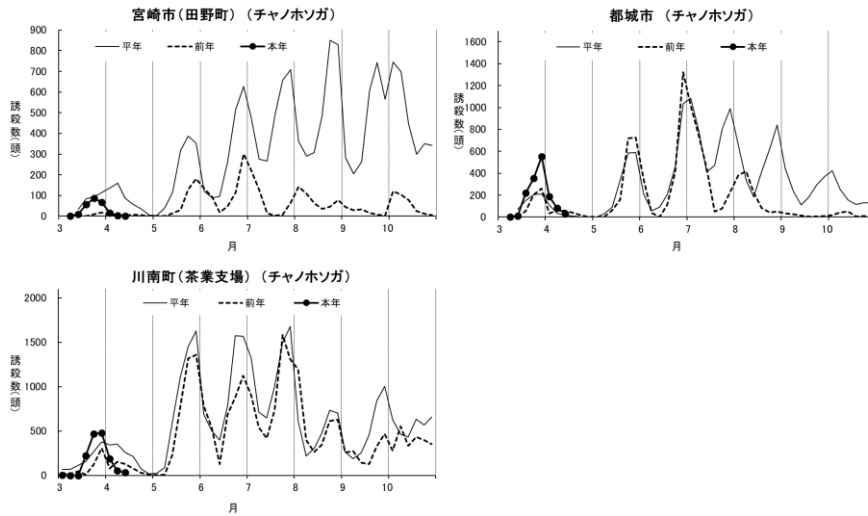
(1) 4月中旬の巡回調査結果

発生面積率 : 0% (平年 4.8%、前年 0%) 平年並
m²当たり巻葉数 : 0葉 (平年 0.1葉、前年 0葉) 平年並

(2) 県内に設置しているフェロモントラップによる誘殺数は、平年並～やや多である。

[防除上の注意]

(1) 次の発蛾最盛期は5月中旬～5月下旬頃と考えられる。ほ場での発生状況を確認し、巻葉前に防除する。



5 カンザワハダニ (多)

※令和8年度病害虫発生予察注意報第1号(令和8年4月27日発表)参照

[予報の根拠]

(1) 4月中旬の巡回調査結果

発生面積率: 66.6% (平年 38.3%、前年 66.6%) 平年より多

寄生葉率: 14.2% (平年 3.9%、前年 13.0%) 平年より多

[防除上の注意]

(1) 同一薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤をローテーションで使用する。

(2) 多発すると、密度抑制が困難になるため、ほ場を観察し、適宜防除を行う。

6 チャノミドリヒメヨコバイ (やや多)

[予報の根拠]

(1) 4月中旬の巡回調査結果

(見取り)

発生面積率: 0% (平年 3.1%、前年 0%) 平年並

寄生葉率: 0% (平年 0.1%、前年 0%) 平年並

(払い落とし)

発生面積率: 41.7% (平年 19.4%、前年 16.7%) 平年より多

払い落とし虫数: 0.4頭 (平年 0.3頭、前年 0.2頭) 平年並

[防除上の注意]

(1) 例年二番茶期から発生が増えてくるので注意する。

7 チャノキイロアザミウマ (並)

[予報の根拠]

(1) 4月中旬の巡回調査結果

(見取り)

発生面積率: 0% (平年 2.3%、前年 0%) 平年並

寄生葉率: 0% (平年 0.1%、前年 0%) 平年並

(払い落とし)

発生面積率: 0% (平年 19.4%、前年 0%) 平年よりやや少

払い落とし虫数: 0頭 (平年 0.6頭、前年 0頭) 平年よりやや少

[防除上の注意]

(1) 二番茶期に向けた防除対策に重点をおく。

8 ツマグロアオカスミカメ (やや多)

[予報の根拠]

(1) 4月中旬の巡回調査結果

発生面積率 : 8.3% (平年 5.4%、前年 0%) 平年よりやや多
㎡当たり被害芽数 : 0.2芽 (平年 0.2芽、前年 0芽) 平年よりやや多

[防除上の注意]

(1) 茶以外の植物にも寄生するため、ほ場周りの除草を行う。

9 クワシロカイガラムシ (やや多)

[予報の根拠]

(1) 4月中旬の巡回調査結果

発生面積率 : 16.7% (平年 14.1%、前年 16.7%) 平年よりやや多
寄生株率 : 10.8% (平年 3.9%、前年 1.7%) 平年より多

[防除上の注意]

(1) 第1世代幼虫の防除適期は、幼虫ふ化開始から2週間後または幼虫ふ化最盛期であるので、ふ化状況をよく観察し防除する。

(2) 薬剤散布量は、成木園で10a当たり1,000リットル程度を目安に、専用噴口を使うなどして枝幹に十分かかるように丁寧に散布する。

○ その他

1 農薬適用の有無などについては次のホームページで確認する。

農林水産省(農薬コーナー)

<http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/>

農林水産消費安全技術センター

<http://www.acis.famic.go.jp/>

2 農薬の使用に当たっては、農薬使用基準の遵守並びに危被害の発生防止に努める。

3 発生量(程度)の区分

| | | | | |
|-------|---|------|----|---------------------------------------|
| 多 | い | (高 | い) | やや多いの外側10%の度数の入る幅 |
| やや多い | | (やや高 | い) | 平年並の外側20%の度数の入る幅 |
| 平年並 | | | | 平年値を中心として40%の度数の入る幅 |
| やや少ない | | (やや低 | い) | 平年並の外側20%の度数の入る幅 |
| 少ない | | (低 | い) | やや少ないの外側10%の度数の入る幅 (平年値は過去10年間の平均) |

4 予察情報の種類

病虫害防除・肥料検査センターから発表する情報は次の5つです。

- (1) 予報・・・向こう1か月の発生状況を予測し、毎月25日前後に発表する。
- (2) 注意報・・・主要な病虫害の多発生が予想され、かつ早めに防除が必要な場合に発表する。
- (3) 警報・・・主要な病虫害の大発生が予想され、かつ緊急に防除が必要な場合に発表する。
- (4) 特殊報・・・県内で初めて発生を認めた病虫害がある時や、病虫害の発生様相が特異な時に発表する。
- (5) 防除情報・・・注意をうながす必要がある病虫害の発生状況や、各種の防除技術指導情報について随時発表する。

○ お知らせ

病虫害防除・肥料検査センターでは、ホームページで情報を提供しています。ホームページアドレスは https://hinatamafin.pref.miyazaki.lg.jp/soshiki/noshi_byogai/index.html です。



【文書取扱】

宮崎県病虫害防除・肥料検査センター 後藤

TEL:0985-73-6670 FAX:0985-73-2127

E-mail:byogaichu-hiryo@pref.miyazaki.lg.jp